

メディアアートの正当な継承者

ジョージ・クラウンタル「DRIVE」

ジョージ・クラウンタルの展覧会「DRIVE」は、これまでのアートラボの展覧会とは、いっけん少し傾向が違い、観る人によっては、もしかすると意外に思えるかもしれない。しかし、結論から言って、僕は今回のクラウンタルの展覧会の方向を支持するだろう。いま、意外、と言ったのは、つまり、この展覧会が、表層的な意味での目新しい技術的條件に基づいたものではないからだ。会場には、ビデオ、正確にはDVDに収録された映像が、厳密に注意深い思慮に基づいて設置されている。つまり、この展覧会には、センサーが観客の行動を感知するとそれに反応して壁が茶色に化ける、というような当世流行りの「インタラクティブ」

な仕掛けは、今回含まれていない。しかし、作家がこの展示で示そうとしていることは、テクノロジーカルな今日的な眺望を構築するという意味で、たいへん示唆に富むことである。説明すれば、クラウンタルがこの展示で展開しようとしているのは、我々の日常の所作、たとえば、歩くこと、信号が赤だったから横断歩道の前で止まること、話すこと、とりわけ会話つまり、相手とのやり取りのなかで相手側の歩歩を導き出したり、あるいは相手に共感を与える、そのような、言語活動もふくめずすべての所作、言い換えれば、我々の「身体」が、今日のテクニカルな眺望のなかには否応なく組み込まれている、という一点から始まる語りかけなのであ

る。いくつかに分割された映像の集積は、黒人ボクサーの動き、ニューヨークの雑踏のなかでの流涕、電話をかける女など我々の都市生活のなかでの風景と、演習戦争でのピンポイント爆撃などの軍事映像などに分類され、観客は青山スバイラルでの展示のデッドエンドで、公衆電話ボックスを横したインスタレーションのなかで語りかける女に出会う。クラウンタルは1958年生まれで、カッセルのドクメンタXに出展、ヨーロッパ・メディアアート・シートの草創期を作り上げたもつとも重要な人物のひとりであるベーター・ヴァイベルに高く評価された。ヴァイベルは現在、ZKM所長であり、ま

文野々村文宏



アートラボ第4回プロスペクト展「ドライブ」は5月17日から28日まで、東京・青山スバイラルにて開催。観客は空間全体を巡ることで、それぞれ表現やリズム、使用テクノロジーが異なる映像を相互に関連させながら自由に見ることが出来る。今世紀の映像発展史を考察しながら、ウェアラブルカメラ、監視カメラなどのセンサー映像をオーバーラップさせ、身体の一部の表現に迫る。5/13、7-9PM、アーティストレクチャー。(無料、要予約) 特キャノン・アートラボ03-5416-3611